

聖書：マタイ 23：1～12

説教題：教師はただ一人

日時：2020年5月3日（朝拝）

これから読むマタイの福音書 23 章には、律法学者やパリサイ人たちに対するイエス様の厳しい批判の言葉が記されています。特に次回見る 13 節以降では「わざわざ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは、云々」という言葉が繰り返して出て来ます。これらの言葉を読むと私たちは律法学者やパリサイ人たちはどうしようもない人たちだったのかと思いかもかもしれませんが、これまでもたびたび触れて来ましたが、当時の人々はそう見ていませんでした。むしろ彼らはイスラエルの宗教に熱心な人たちで、特に律法を忠実に守り行おうと研究し、努力している道徳的な人たちとして一般民衆から尊敬されていました。その彼らがあからさまに批判されています。予想もしなかった人々への思いもよらない厳しい言葉の連続となっているのです。

しかしこれは批判することそれ自体を目的とした言葉ではありませんでした。1 節にイエス様は「群衆と弟子たちに語られた」とありますように、イエス様は弟子たちと、耳を傾ける余地のある群衆に、律法学者やパリサイ人たちの誤った道を行かないようにと教え導くためにこれらの言葉を語ったのです。正しい道、神の祝福の道を進む者となるように！と。その目的に沿って、私たちは正しい道と誤った道を見分けて、真の救いの道、天の御国へ通じる道こそを進む者となるように導かれたいと思います。

まずイエス様は 2 節で「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています」と言います。「モーセの座」とは、モーセの律法について人々を教え導く立場に彼らがあることを指します。その彼らについてイエス様は 3 節で「ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」と言います。これはどういう意味でしょうか。イエス様はここで彼らの言うことはすべて正しいと承認しているわけではありません。彼らの教えには様々な誤りがあることをイエス様はこれまでも示して来ましたが、たとえばこの福音書の 15 章にもそのことが記されていました。この意味はあくまでも彼らがモーセの教えを正しく取り次いでいる限り、聞きなさいということです。それよりも強調点は後ろの方にあります。彼らは言うだけで実行しない。これは本当にそうでしょうか。彼らは口ばかり達者で行いのない人たちだったのでしょうか。先に触れたように、

律法学者やパリサイ人たちは道徳的な人たちとして一般民衆から尊敬されていました。ですから彼らに行いはあったのです。5 節に「彼らがしている行いは」とありますように、彼らは行っていました。ところがイエス様によれば、「彼らは言うだけで実行しない」。彼らとしては行っている、神から見ると実行していないと評される。一生懸命宗教的な行いをして、人々から「さすが道徳的な人たち！」と称賛されていても、神から見ると何もない。これが大きな問題です。つまり彼らの行いは神の前に良しとされるものでは全然なかったということです。だから彼らをまねないように！この間違っただ道を行かないように！とイエス様は群衆を教え諭しているわけです。

4 節に「また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せる」とあります。彼らはモーセの律法を解釈して色々なアドバイス、指針、ガイドラインを作りました。言うまでもなくモーセの律法はある特定の時代に語られたものであって、あらゆる時代のあらゆる状況に事細かくどのように適用すべきかまでは書いてありません。ですからイエス様の時代に生きていた人々も、モーセの教えを自分たちの状況にどう当てはめ、実践したら良いのか、パリサイ人たちに尋ねたことでしょう。その求めに応じて彼らは多くの規定を定めました。その結果、彼らは人々の上に重くて負いきれない荷を束ねてドサッと載せるようなことをしてしまっていたのです。これは人間の教えが神のこぼれや戒めに取って代わる時に起こることです。律法を本来の意図に沿って正しく説き明かさずなら、それは人々に自由を与え、いのちを与え、喜びに満たすはずですが、ヨハネの福音書 8 章 32 節：「真理はあなたがたを自由にします。」 またダビデは詩篇 119 篇でこう言いました。「どれほど私はあなたのみおしえを愛していることでしょうか。・・・それは蜜よりも私の口に甘いのです。」 また律法の真の解釈者であるイエス様は、「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい」と言われ、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」と言われました。律法はそのように説き明かされてこそ本当です。ところが人間の教えが上に来ると、それは人を生かすどころか苦しめるものになってしまう。苦しみあえでいる人に益々重荷を束ねて負わせる結果になってしまうのです。そうしておきながら彼らは指一本貸そうとしなかった。様々な規定を守らない人、守れない人たちを見下すだけだったのです。

そんな彼らの大きな問題点をイエス様は 5 節以降で明らかにしています。それは、彼らは様々な行いをしているけれども、その行いはすべて「人に見せるため」のものであるということです。そこに「聖句を入れる小箱」という言葉が出て来ます。第 3 版まで

は「経札の幅を広くしたり」と訳されていました。これはたとえば申命記 6 章 6～8 節にこう記されていることに基づく彼らの適用でした。「私が今日あなたに命じるこれらのことばを心にとどめなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家で座っているときも道を歩くときも、寝るときも起きるときも、これを彼らに語りなさい。これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」彼らはこれを文字通りに適用し、これらの聖句を記した紙を入れた箱を、腕あるいは額に結び付けました。これによって本当に御言葉を心に留めるようにするならば良い。しかし彼らがこのようにした第一の目的は「人に見せるため」ということでした。私は神のことばをいつもこのように体に括り付けて心にとどめています！と人々にアピールする。インターネット等で調べると分かりますが、本当に額の上に小箱をつけて頭の周りをひもで結ぶようです。そんな小箱が顔の正面に付いていたら、いやがうえにも目につきます。その小箱をどんどん大きくして、私は敬虔な人間です！神のことばを覚えています！とアピールする。また「衣のふさ」については民数記 15 章 38～39 節にこうあります。「イスラエルの子らに告げて、彼らが代々にわたり、衣服の裾の四隅に房を作り、その隅の房に青いひもを付けるように言え。その房はあなたがたのためであって、あなたがたがそれを見て、主のすべての命令を思い起こしてそれを行うためであり、淫らなことをする自分の心と目の欲にしたがって、さまよい歩くことのないようにするためである。」これも正しく用いて主の命令を実際に思い起こすのなら良い。しかし彼らはいかに私は律法を大事にして、これを守り行っている人間か、そのために努力している人間か！ということをおアピールすることに一生懸命。そのため、そのふさをどんどん長くする。

6 節と 7 節も同じです。彼らは宴会の上座や会堂の上席を好む。そこに座って、人々から高く評価されている自分であることを確かめたい。広場であいさつされることや、人々から「先生」と呼ばれることもそうです。「先生」という言葉には印がついていて、欄外に原語は「ラビ」と記されています。これはもともとは「私の偉大な方」という意味です。「私にとって偉大な方」「大きい方」。そのように言ってもらいたい。そのために色々な行いをするのです。それは全部自分のためです。考えているのはいつも人々からの称賛であり、自分の榮譽です。

ここまで聞いて私たちはどう思うでしょうか。これだから律法学者やパリサイ人たちは・・・と思うでしょうか。むしろ、これは他人事とは思えない言葉として私たちの心に刺さって来る言葉でもあるのではないのでしょうか。私たちも様々な行いをしています。

しかしなぜそれをしているのかと検討すると、実は人の目を気にしている。あの人この人から尊敬されたい、一目置かれたい、重要な存在であると評価されたい。そこで人に見せるためのパフォーマンスをすることにいつも腐心している。信仰生活でもそうです。神への愛や神への誠実は二の次、三の次、むしろ視界から消えているくらいで、一番私の関心を占めていることは、あの人この人にこれはどう見られるか、どう見せるか。神をそのための出しに使っている。このような「人に見せる」生き方から私たちはどれだけ自由であるのでしょうか。突き詰めると結局私の生き方はすべてこれになっているということはないでしょうか。イエス様はこれは間違った道だと言われたのです。この生き方をまねてはいけません。私たちはどうしたらこの誤った道から抜け出すことができるのでしょうか。

イエス様は8節以降で「しかし、あなたがたは」と始めて、行くべき道を示してくださっています。イエス様は8節で「あなたがたは先生と呼ばれてはいけません」、9節で「だれかを自分たちの父と呼んではいけません」、10節で「また、師と呼ばれてはいけません」と言います。これはクリスチャンの間ではこのような言葉を一切使ってはならないということでしょうか。教会では牧師を先生と呼ぶべきではないし、またCS教師というような言い方もやめなければならないということでしょうか。しかし聖書は一方で、ある人々に「教師」という言葉を使っています。使徒の働き13章にはアンテオケ教会にバルナバやサウロを含めた複数の預言者や教師がいたと記されています。またエペソ人への手紙4章11節には、キリストご自身がある人を使徒、預言者、伝道者、また牧師、教師として立てたと語られています。あるいは9節に「あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです」と言われているからと言って、家庭で「父」をそのように呼んではならないということにはなりません。ですからこれらの言葉を適切に使う余地はあるということです。問題にされていることは、人々から高く評価されたり、重んじられることを求めて、このような名で呼ばれることを自ら願うようであってはならないということです。それはこの後の11節にありますように、「自分を高くする者」に該当することであって、その人はそこで言われるように、やがて低くされることに至るのです。

そうならないためにイエス様はここで大切な真理を示してくださいました。なぜ先生あるいはラビと呼ばれてはならないのか。それはあなたがたの教師はただ一人だからと言われています。その一人とは、10節にはっきり書いてありますように、キリストです。

その方のもとであなたがたはみな兄弟であると言われていました。私たちは自分が教師と呼ばれることを好み、自らその地位を求めるかもしれません。人間世界だけを見渡して自分が人々の上に立った気分になるかもしれません。しかしイエス様いわく、あなたがたの教師はただお一人である。私たちの真の先生はイエス様お一人のみです。この方はどんな他の人間の教師とも比較にならない別格の存在です。はるか上におられるまことの教師です。この方を忘れて、自分がひとかどの教師であるかのような振りをしてはいけません。教師はただお一人です。あとはみな兄弟・姉妹たちです。私たちはこのただお一人の教師を見上げて自分の分をわきまえなければなりません。この方を真に見上げるなら、自分を教師だなどととても恥ずかしくて呼べないように思うはずで

9 節の「父」もそうです。人間の間で「我らの父」と呼ばれることはたいそう名誉なことでしょう。しかし真の意味で「父」と呼ばれるべき方はお一人です。天におられる父なる神のみです。その方を忘れて、まるで自分が父であるかのように尊大でわきまのない態度を取ってはならない。急いでその座を降りて父なる神にその場所を明け渡し、自らはへりくだらなければならない。

そして私たちがすべきことは、自分が座っていた高い場所から急いで降りるだけでなく、このただお一人の本当の教師である方の姿を仰ぐことでしょう。このただお一人の私たちの教師はどんな教師でしょうか。ヨハネの福音書 13 章には、イエス様が弟子たちの足を洗われた記事が出て来ます。その 13 節でイエス様は「あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。」と言われました。そして続く 14 節でこう言われました。「主あり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」 私たちはこの私たちのただお一人の教師のお姿を良く見なければなりません。この教師は私たちの前にかがんでくださり、手ぬぐいとたらいをもって、弟子たちの最も汚い部分である足を洗ってくださいました。そのように仕え、奉仕していただきました。そしてこのお姿が指し示す究極的な姿が、あの十字架上における身代わりの死でした。イエス様はマタイの福音書 20 章 26～28 節でこう言っておられました。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。」 私たちの教師は人々から

スゴイと言われて、人々に仕えてもらうためではなく、かえって仕えるために来られました。そして私たちのしもべとなり、最も低い所にまで、十字架上でご自分のいのちをささげるところにまで下られました。これは単なる一つの模範であるだけではありません。これは私たちには特に関係のない一つの模範なのではなく、私たちの救いのためにイエス様がしてくださったことです。こんな罪深い、どうしようもない者たちのために、イエス様はかがんでくださり、その尊いのちまでも投げ出してくださいました。ご自身の持てるすべてのものをささげてくださいました。これぞただお一人の私たちのまことの教師が示されたお姿です。私たちがいつも仰いでいなければならない、まことの教師のお姿です。

イエス様は最後 11～12 節でこう言われます。「あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。」 これはもちろん単なる方便と考えられてはなりません。やがて高くされるために今は一時的に低くなっておこうと。私たちにはこの御言葉さえもそのように取る誘惑があります。自分を低くする者が高くされると知って、今度は低い歩みをするにおいて競うのです。皆さん、こんなに低く仕えている私を見てください！これによって私を高く評価してください！もうそろそろ私を高い地位に引き上げてくださってもよろしいのではないのでしょうか！と。しかしこれは人間世界で自分を低くすればやがて人間によって高くされるというこの世の処世訓を教えたものではないのです。これは人が私たちにすることではなく、神が最後の日に私たちにしてくださることについて語っているものです。私たちの先生であり、教師であるイエス様にならう歩みは、この世では蔑まれるかもしれません。見返りはなく人々に利用されるだけかもしれません。しかし神は見ておられ、必ずやがて高くしてくださるという約束がここに語られています。だから心配せずに主にならって仕える歩みに進めば良い。評価される方は神ですから、ごまかしはききません。そのことを覚えて、私たちは人に見せるためのパフォーマンスではなく、すべてを見ておられる神の前で真実に歩むように集中すれば良いのです。そうするなら神はそれを喜び、やがての日に高く評価してくださるのです。そのことに慰めと励ましと勇気を得て、神の国の基準に生きるようにと私たちは召されています。

どうやったら人々に高く評価され、高い地位に上ることができるか、無意識の内に判断し、その思いに動かされて生活しやすい私たち。そのために人々にどう見せるかに多くの苦勞と時間を費やしがちな私たち。しかし私たちは今日の箇所を通して私たちの教

師はただ一人であることを改めて覚えたいと思います。そしてこの方をいつも見上げる生活をしたいと思います。この方は天の王座を下りて、私たちのような者の救いのために仕え、ご自身の尊いいのちさえも捨てて奉仕してくださいました。私たちはこのただお一人の教師に感謝して、この方にこそならう弟子の歩みを導かれて行きたいと思いません。そしてそこにこの世の考え方や価値観とは大きく異なる天の御国の価値観を証しつつ、やがての日に神によって大いに高くされ、称賛を受けることに至る、まことの祝福の道、救いの道を進む者へ導かれて行きたいと思いません。